

上野国における一本造り軒丸瓦の導入と展開

高 井 佳 弘

- | | |
|------------------|-----------------------|
| 1. はじめに | 6. 有絞りから無絞りへ |
| 2. 「一本造り」の概要 | 7. 無絞り一本造りに関するいくつかの問題 |
| 3. 上植木廃寺への導入 | 8. 無絞り一本造りの展開 |
| 4. 有絞り一本造りの導入と影響 | 9. 無絞り一本造りの国外への伝播 |
| 5. 横置き型一本造りの導入 | 10. おわりに |

— 論文要旨 —

古代の瓦製作技法の中に軒丸瓦一本造りというものがあることは、すでに広く知られている。上野国では8世紀前半から11世紀まで、その技法による瓦が数多く作られ、造瓦技法の主流となった。その初現は上植木廃寺の軒丸瓦である。そこでは創建期の一群に続いて縦置き型一本造り（瓦当裏面に絞り目のある布目痕が残る）によるものが用いられ、以後その技法による瓦が作られることになる。この技法は武藏北部にも伝わり、さらに武藏国分寺所用瓦にも用いられている。上野国内では8世紀中頃まで用いられるが、国分寺創建時に横置き型一本造りが導入されて、国内の瓦製作技法は大きな影響を受け、瓦当裏面に絞り目のない縦置き型一本造りが考案され、以後その技法が上野国の主流となる。終末は明確ではないが、少なくとも11世紀までは用いられ続けると思われる。この技法はやはり武藏北部にも伝わっている。このように軒丸瓦一本造りは、この地域の造瓦技法を考える上で重要な技法であり、上野国内にとどまらず、武藏国歴史を考える上でも重要な資料となるものである。

上野国を中心とした地域の一本造りについては、これまでに多くの研究が発表されており、すでに大枠は判明していると言っても過言ではない状況である。しかし、上植木廃寺の資料など、これまで詳細が明らかではなかったものも存在するし、技法の復元案についてもいくつか疑問点がある。さらに瓦研究の深化に伴って、その他の資料の再検討も行う必要性が高まっている。本稿はそれらの点を中心に、一本造りの導入から展開、終末までの様相の整理を行うものである。

キーワード

対象時代 奈良・平安時代
対象地域 上野国、武藏国
研究対象 軒丸瓦、製作技法

1. はじめに

古代の瓦製作技法のなかに、軒丸瓦一本造りというものがあることは広く知られている。この技法による瓦は日本各地にみられるが、上野国は関東地方で最も早くこの技法を取り入れた地域である。しかもその後いくつかの変化を経ながら、多くの種類の瓦をこの技法で生産し続けた。東国諸国の中でこれほど一本造りが盛んに行われたのは、上野以外にはない。このような上野国の瓦生産の動向は周辺の国々にも影響を与え、特に地理的に近い武藏国では、北部の寺院や武藏国分寺でこの技法による瓦が使われている。そのためこの一本造りという技法は、この地域の瓦を研究する上で避けては通れない問題であり、以前から多くの研究者の注目を集めてきた。すでにその変遷や派生の様相などの大枠は、ほぼ判明しているといってよい水準に達している。

しかしながら、その技法による瓦の詳細について、特に上植木廃寺出土瓦の詳細については、十分に明らかにされてきたとは言い難い。その他の瓦についても、近年の瓦研究の深化、技法研究の精緻化に伴って、再検討の必要を感じているのは筆者だけではないであろう。また、これまで提示してきた技法の復元案のなかには、訂正を要する点などが散見される。これらについても再検討が必要であろう。本稿はそういった動機から、上野国内における一本造り技法の様相の整理を行なうものである。

ただし先述のように、一本造りは上野国のみにあるのではなく、周辺の国にも分布している。本来はそれらもすべて対象として検討を加えるべきであるし、その方が問題がより明確になるとは思われるが、すべての資料に詳細な検討を加えるのは時間的な制約からできなかったので、今回は上野国内に限定することにし、武藏地域については簡単に触れるにとどめた。

2. 「一本造り」の概要

「一本造り」という技法そのものについては、すでに多くの研究が蓄積されている。しかし、以前の論文にはかなり混乱が見られるものもあったし、研究者によって

用語や分類、記述の仕方がまちまちでもあった。そのため、研究史の整理と技法の復元を行えば、それだけでかなり長大な論文が必要になると思われる。本稿はこの技法自体を問題とするものではないので、その研究史の詳細に立ち入るつもりはないが、どのような用語を用いるのかを含め、上野国内の一本造りの概要を初めに触れておく必要があるであろう。

まず一本造りとはどのような技法であるのか、大まかに限定することから始めたい。

筆者は以前上野国分寺の報告書（前沢・高井 1989）で述べたように、軒丸瓦の製作技法は、瓦当部と丸瓦部とをいつどのように作り出すかという点に着目して分類するのが有効であると考えている。報告書では以下の3種類に大別した（図1）。

A あらかじめ成形した丸瓦を別に作った瓦当部に接合する技法（「接着法」や「印籠付け」など、瓦当・丸瓦接合系の技法）

B 丸瓦部と瓦当部とを同時に作り出す技法

C あらかじめ成形した丸瓦円筒の内側に円板形の粘土をはめ込んで瓦当部を作る技法（いわゆる「嵌め込み」技法）

このうちBが一本造りと呼ばれる技法である。この技法の特徴は、型を用いてそこに粘土を密着させ、一度に一本の軒丸瓦を成形してしまうことにある。型からはずすのは完成した時である。これがAの瓦当・丸瓦接合系技法やCの嵌め込み技法との大きな違いである。Aでは丸瓦部と瓦当部とは別々に造られたのち、接合される。つまり言い換えれば、Aでは部品をまず造り、それを接合するという工程を取るのである。Cでも丸瓦円筒をまず造るという工程を取る。それに対してB=一本造りは部品の状態のまま型からはずされる時がなく、連続した工程で一本の軒丸瓦を造っていくのである。また、AやCでは丸瓦部と瓦当部との成形時期が異なることとなり、そのため両者の粘土は乾燥度と質に違いを生じ、接合部で剥がれやすくなる。剥がれていった個体でも、断面を見ると接合部分を観察できることが多い。しかし一本造りでは、将来丸瓦部になる部分も瓦当部になる部分

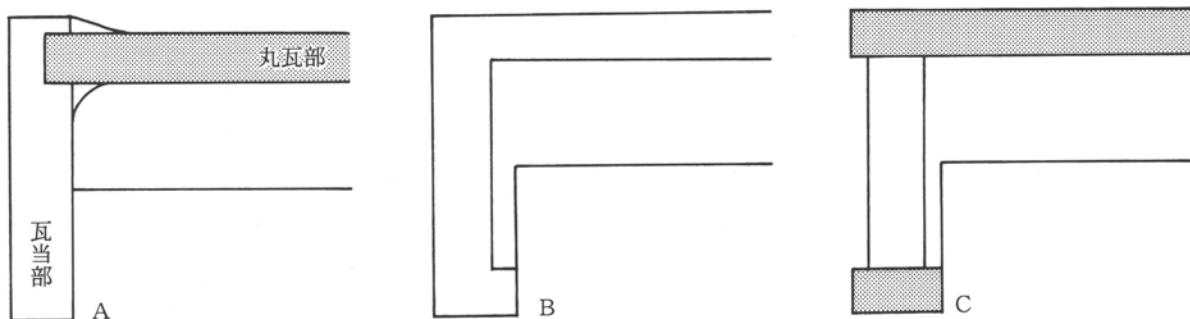


図1 軒丸瓦製作技法模式図

も粘土が同じ程度に柔らかい時に成形されるので、粘土同士がよく馴染むことになる。もちろん、粘土を複数回に分けて足す場合でも、一本の軒丸瓦を作るのに要する粘土は同じ粘土塊から取るであろうから、どの部分もほぼ同じ土質となり、接合の跡は見えにくくなるし、接合部から剥がれることも少なくなると思われる¹⁾。

この一本造り技法にはいくつかの種類があることが知られているが、型の形態から大きくふたつに分けるのがふつうである。それは図2にあげたような2種類であるが、それぞれの名称についてもこれまでにいくつかの名前が提唱されていた。ここでは、両者の対比を最もよく表していると思われる、「縦置き型」「横置き型」という名称を使用したい(上原 1997)。このような型を用いて、軒丸瓦が一本ずつ造られた。

上野国ではこのうち縦置き型を用いた一本造りが主流であるが、上野における変遷を考える場合には、これまでの研究と同様、瓦当裏面の布目痕の形態に注目するのが有効である。それには布を絞ったような布目痕と、そのような絞り目のない布目痕との2種類があり、本稿では前者を「有絞り」布目痕、後者を「無絞り」布目痕と呼ぶことにする。実際の出土品からこの両者を比べてみると、布目痕の違い以外には大きな違いは認められず、結局この両者は布を型=模骨にかぶせる方法が違うだけで、技法として本質的な違いはないものと考えられる。以後本稿ではこの両者について論じるが、有絞り布目痕

をもつ縦置き型一本造りを「有絞り一本造り」、無絞り布目痕をもつ縦置き型一本造りを「無絞り一本造り」と略して呼ぶことにしたい。実は上野国の横置き型一本造りも、瓦当裏面に布目痕が残っているとすれば無絞りであるはずだが、この技法は「横置き型一本造り」とそのまま呼ぶことにする。

その製作工程については、紙数の関係もあり詳細は省略したい。しかし後述のように、上野国の縦置き型一本造りでは誤った技法が提唱されていることもあるので、ここでは簡単に筆者の復元案を示しておく。もちろん地域によって範種によって詳細は異なることが考えられるのではあるが、上野の場合、大枠は上野国分寺の報告書(前沢・高井 1989)で述べた通りで大過ないものと考えている。それは図3にあげたとおりである。

3. 上植木廃寺への導入

関東地方で最も早く一本造りが見られるのが伊勢崎市上植木廃寺であることは研究者間で異論がないようである。上植木廃寺は7世紀第4四半期前半=天武朝頃に造営が開始されたと考えられる、上野国を代表する白鳳寺院である²⁾。ここでは創建期の一群に統いて有絞りの縦置き型一本造りが導入され、それが以後の上野国の瓦生産に大きな影響を与えることになる。以下この出土瓦について、伊勢崎市教育委員会の発掘資料を中心にその詳細を紹介・検討したい。

上植木廃寺に見られる有絞りの一本造り技法の瓦は、以下の5範種である。これらの瓦の詳細については未だにその詳細が発表されていないので、ここではやや詳しく紹介することにする。

まず、Cと分類したのは単弁8葉のものである。

C 01a・b³⁾ (図5-1-2・須田氏006型) この瓦には彫り直しがあり、生産期間の途中で蓮華文外側の圈線の上に壺錐状のもので小さな連珠文が彫り加えられている。このため、彫り直し前をa、彫り直し後をbと呼んで区別することにする。

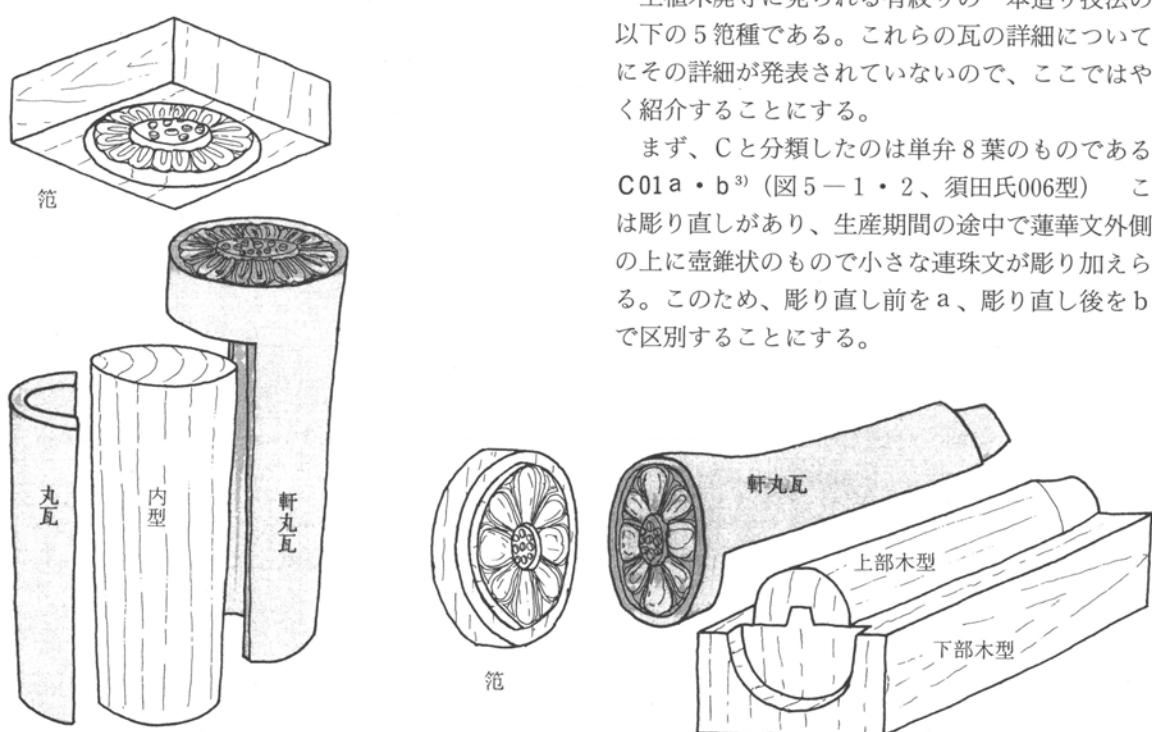


図2 縦置き型一本造り(左)と横置き型一本造り(右)の模式図(上原 1997による)

縦置き型は南滋賀廃寺、横置き型は大山廃寺のものを復元している。上野例は範の形・文様などが異なる。なお、実際は内型(模骨)・木型には布がかぶせられる。

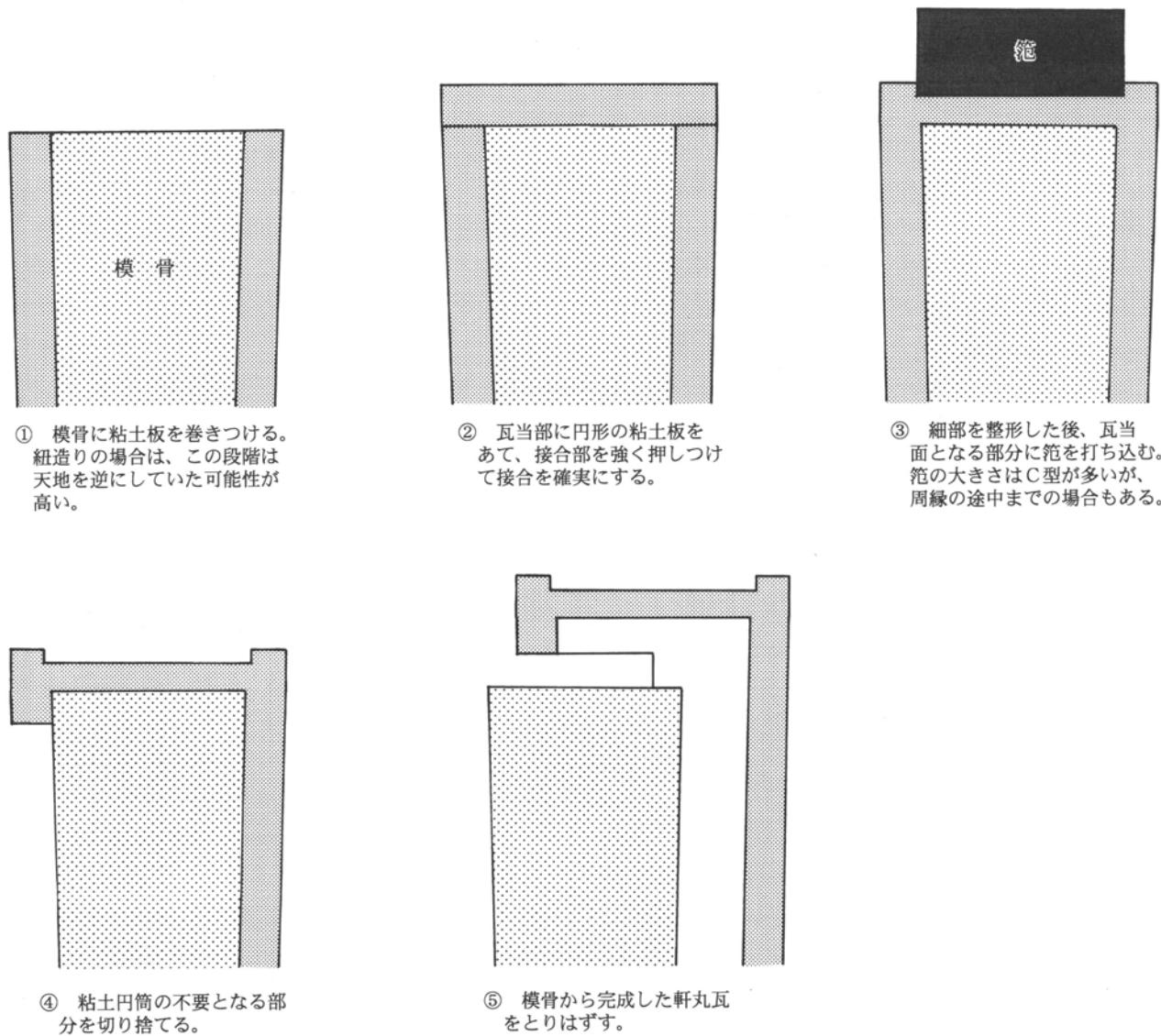


図3 縦置き一本造りの製作工程模式図

中房は低いが円盤形に突出し、蓮子は1+6である。蓮弁は涙滴形で、範の状態がいい個体では小さく細い棒状の子葉があるが、消えてしまっている個体が多い。蓮華文の周りには1本の圈線が巡り、bではここに22個の珠文が彫り加えられる。周縁は無文の直立縁である。

丸瓦部は広端部まで密に叩きが施されるが、その叩き目には格子叩きと米字叩きの2種類がある。この2種類の叩きはa・bいずれにも見られることから、時間的な前後関係にあるわけではなく、ほぼ同時期に両方とも用いられていることがわかる。

伊勢崎市教育委員会の発掘調査では、C01aは19点、C01bは12点出土している。aは遺跡全体から出土していて、特に集中箇所はない。bは5点が西回廊から出土しており注目される。

同範品は吾妻町金井廃寺でaが表採されている⁴⁾。

生産瓦窯は不明である。太田市萩原瓦窯跡から米字叩

きの瓦が表採されていることから、そこである可能性もあるが、その瓦窯の主たる供給先である寺井廃寺ではC01は確認されていない。おそらく萩原瓦窯で生産されていたのは後述のE01であろう。C01は佐位郡周辺のどこかに瓦窯があったのではなかろうか。

C02(図5-3、須田氏009型) 細い涙滴形の子葉をもつ二重蓮弁のものである。中房は円盤状に突出している。蓮子は竹管状のものを押しつけて施文したものであり、1+6、1+4などが知られる(須田 1985)ほか、国分寺の同範品には0+4もある。蓮華文の周りにはやはり竹管による連珠文をめぐらし、周縁は幅狭く無文である。

上植木廃寺での出土数は少なく、伊勢崎市の調査では小破片1点しか出土していない。

同範品は国分寺(E001)、赤堀町間野谷遺跡にある。間野谷遺跡は詳細不明ながら、その立地から瓦窯である可能性が高いと考えられる。

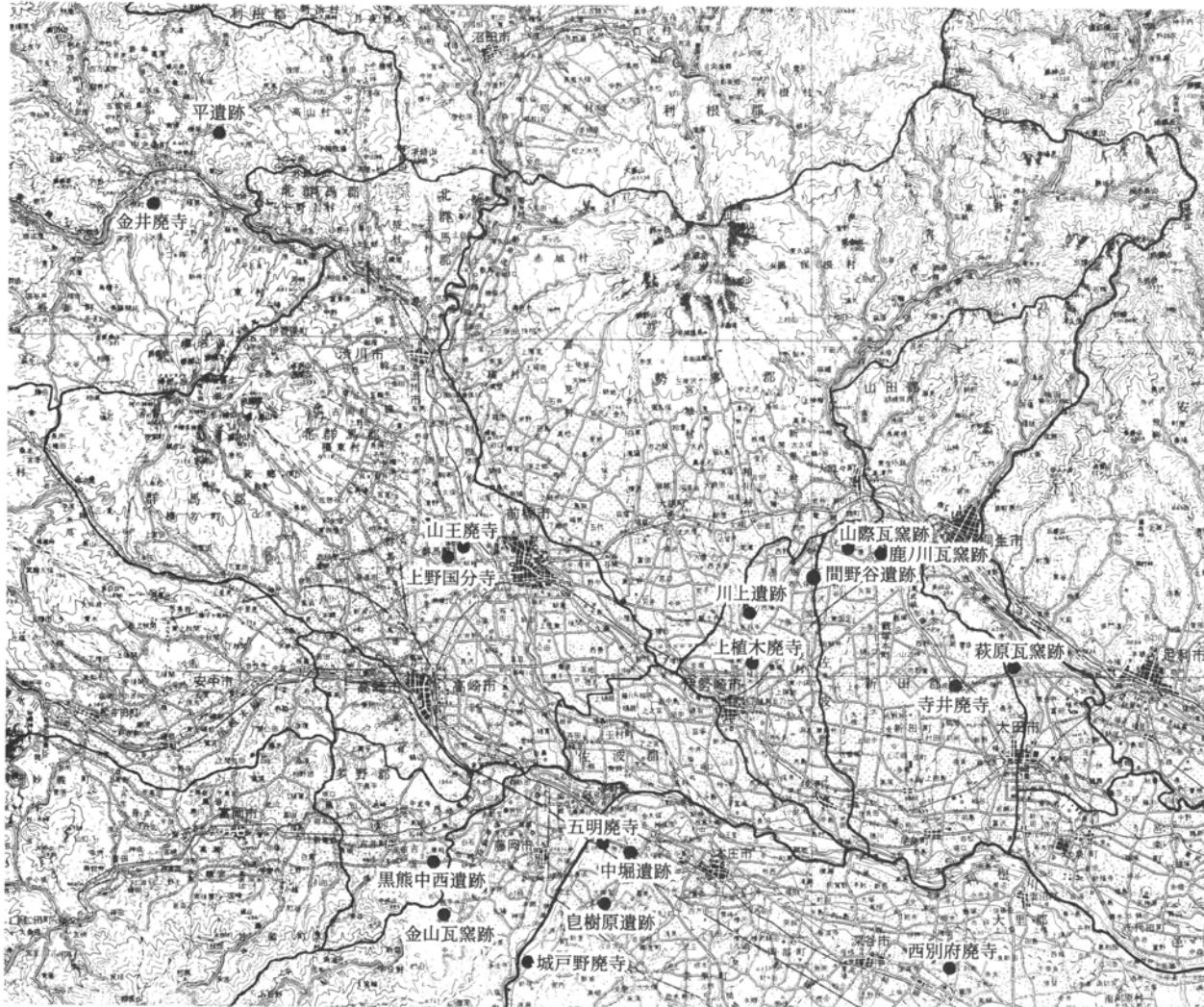


図4 関連遺跡位置図 (1/400,000 國土地理院20万分の1地形図「長野」「宇都宮」を縮小)
古代の郡域は未確定であり、境界線は推定である。

C03a・b (図5-4・5) C02から子葉を除いたような文様をもつが、実際に子葉がないもの (a) と、4葉の蓮弁にだけ子葉を彫り加えたもの (b) とがある。

蓮子や、蓮華文の周囲の連珠文、蓮弁先端の珠文など、珠文はすべて竹管によるものである。そのため、各珠文の数、蓮弁先端の珠文の有無が異なる個体がある。図にはaで蓮子が1+5、蓮弁先端の珠文がないものと、bで蓮子が0+4、蓮弁先端の珠文があるものとをあげたが、bには蓮子が1+4に見えるものもある。もちろん、他にも異なるものがある可能性がある。また、周囲の連珠文は、もともと同位置に範による連珠文があったらしく、一部その痕跡が残っている。その範による連珠文が明瞭でなかったか、あるいは数が少なすぎたため、のちに竹管で再施文したのであろう。

丸瓦凸面には格子叩き目が残るが、これは格子目を彫り込んだ円柱をローラー状に回転させて施したもので、重なりが1カ所しか見られない。

丸瓦凹面には明瞭ではないが長軸方向の凹凸が見られ、側板連結模骨を用いている可能性が高い。

出土数は8点で、そのうち4点は塔・西回廊⁵、2点は西回廊、1点は塔から出土している。少ない出土点数なので断定するには躊躇するが、塔・西回廊のかなり狭い範囲を中心として用いられた可能性が考えられる。

生産瓦窯は不明である。

D01 (図6-1、須田氏010型) Dとしたのは単弁15葉のもので、1範種だけ属する。これも蓮子は竹管で施すが、それ以外の文様は範によっている。

蓮弁は小さく、撥形の間弁と交互に配される。中房は円盤状に突出し、蓮子は1+6。蓮華文の周りには、珠文と鼓形の文様とが交互にめぐっているが、これは圈線の上に竹管で連珠文が付けられた文様を意識しているのだろう。周縁は直立縁で無文である。

丸瓦部凸面には格子叩きが見られるが、これもローラー状のもので施されている。図示したものはそのロー

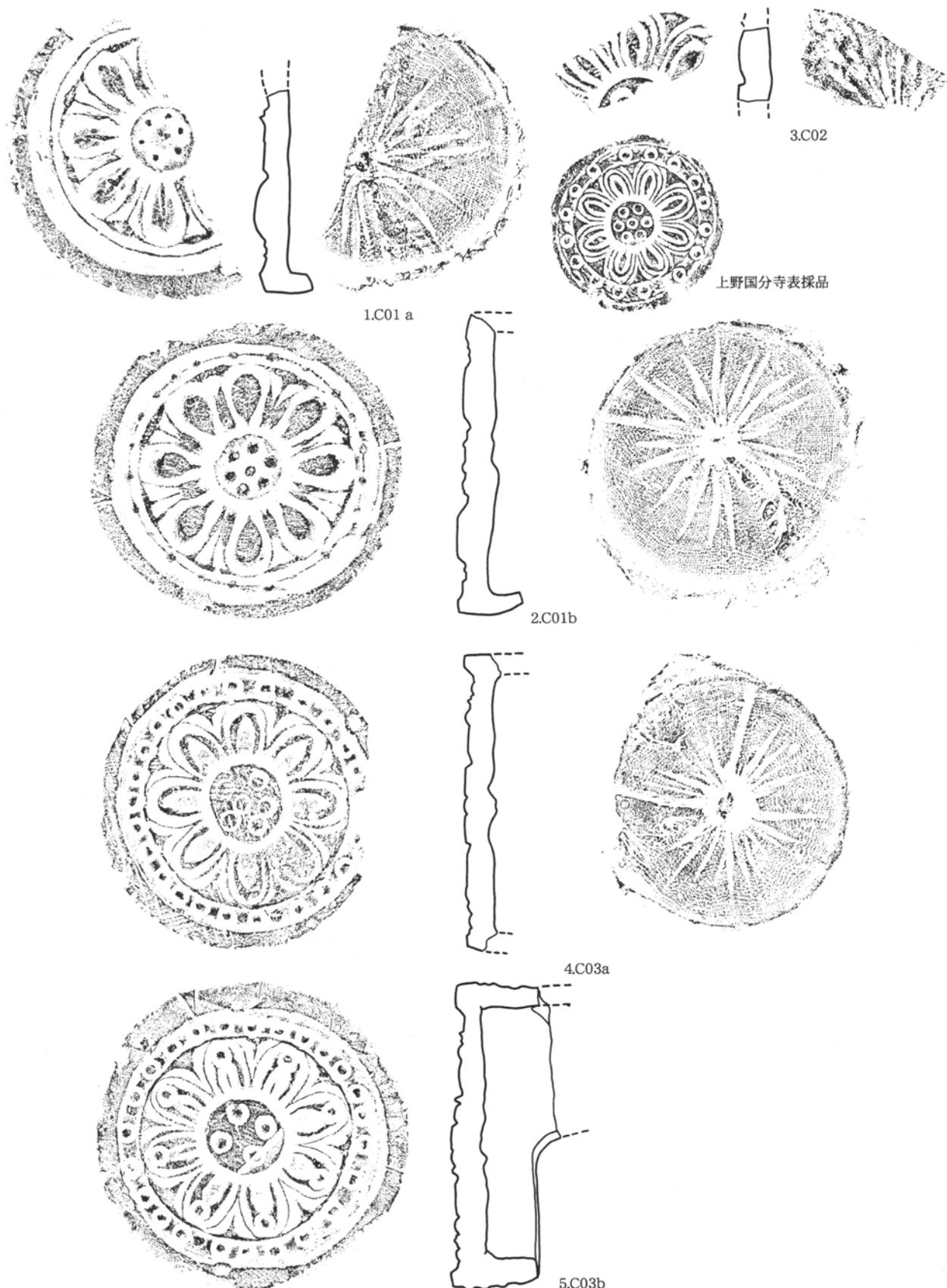


図5 上植木廃寺出土の「有絞り一本造り」軒丸瓦(1) (1/3)

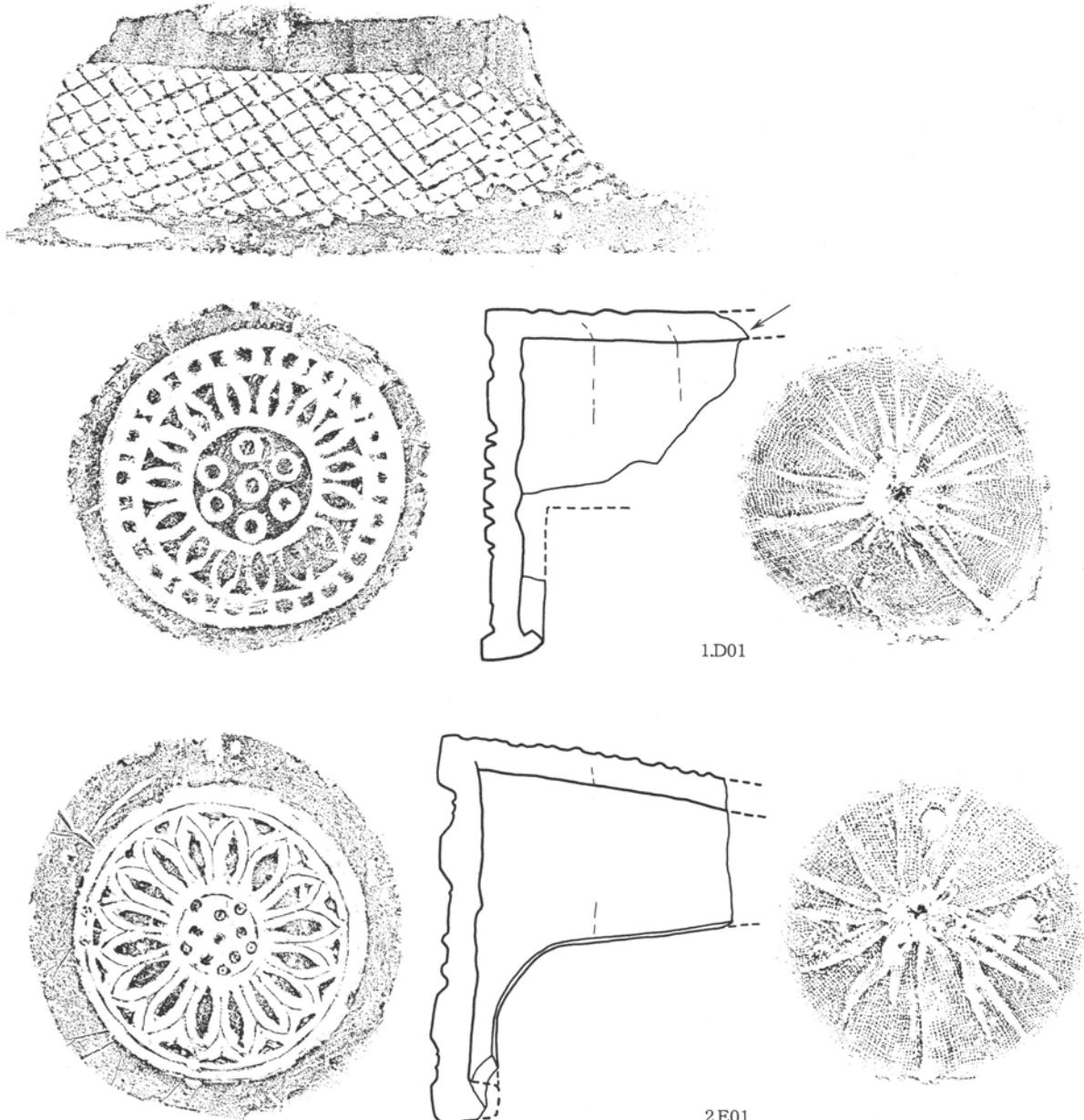


図6 上植木廃寺出土の「有紋り一本造り」軒丸瓦(2) (1/3)

ラーの幅が分かり、約6.5cmである。

丸瓦凹面には明瞭ではないが長軸方向の凹凸が見られ、側板連結模骨を用いている可能性が高い。また、これも痕跡は明瞭ではないが、丸瓦は紐作りによるらしい。図にあげた個体では、ちょうど粘土紐の接合部分で割れており(矢印の部分)、その割れ口は図のように凹面側から凸面側に向かって斜めに傾いている。この傾きから見ると、丸瓦を作る時には広端部を下にしていたようである。その後瓦当部を作る時に天地を逆にしたのであろう。

出土数は24点で、塔8点、塔・西回廊4点、西回廊3点と、塔周辺に多い傾向がある。

生産瓦窯は不明で、同範品は国分寺(H001)にある。E01(図6-2、須田氏012型) Eは単弁16葉のもので、

1範種がある。蓮弁は高く盛り上がり、周囲を凸線で囲む。間弁は小さな三角形である。中房は低く、凸線のみで表され、蓮子は1+5+5である。蓮華文の周りには圈線が1本めぐるが、その上にわずか2点だけ珠文が付けられている。この珠文は範によるものであり、C01bと同様、壺錐で彫ったような形状である。この珠文がない個体は確認できていないので、最初から範に彫られていたものと思われる。周縁は無文の直立縁である。

丸瓦凸面には密な叩きが施されるが、格子叩きと米字叩きの2種類がある。

丸瓦凹面には明瞭ではないが長軸方向の凹凸が見られ、側板連結模骨を用いている可能性が高い。また、これも紐作りで作られているらしく、不明瞭ながら接合痕

が見える。

同範品は太田市寺井廃寺、埼玉県上里町五明廃寺にある⁶⁾。生産瓦窯は、米字叩きの瓦が出土することから、太田市萩原瓦窯だと考えられる。しかし、五明廃寺のものも含め、すべてのものがそこで生産されていたかどうかは未確定である。

この萩原瓦窯は寺井廃寺の創建瓦を生産したことで知られるが、その創建期の軒丸瓦は川原寺式のもので、蓮子は $1+5+8$ という、中心蓮子の周りに二重にめぐるものである。さらに寺井廃寺には、その直後に位置付けられる瓦として山王廃寺と同範の複弁7葉のものがあるが、これも蓮子が $1+4+8$ で、二重になっている。東毛地域では二重にめぐる蓮子は珍しいので、E01の二重にめぐる蓮子はこれらに由来するのかもしれない。とすれば、この瓦はやはり寺井廃寺に関連する工房で創出されたと考えることができ、生産瓦窯も萩原瓦窯である可能性がより高まると考えられる。

上植木廃寺からは以上5範種が出土していて、これが上野国における有絞り一本造りの主流をなしている。上野国内にはこのほか数範種が知られているが、そのうち主なものについては後述する。

以上の5範種の瓦の変遷は図7のように考えることができる。

まず、最古に位置付けられるのはC01であると考えられる⁷⁾。C01は創建期の文様の系譜を引いていると考えられるからである。上植木廃寺創建期の軒丸瓦は、図7上にあげたようなもので、いわゆる「山田寺系」単弁8葉蓮華文であり、現在5範種が知られている。これらについては、すでに紹介したことがあるので詳細はそれに譲る（高井・出浦 2001）。C01は圈線が巡っていることや、無文で直立縁の周縁があること、蓮子が $1+6$ であることなどが異なり、両者には無視しがたいほどの違いが認められるが、蓮弁には小さな棒状の子葉があり、創建期の文様の系譜を引いていることは確かであろう。

C01の直後に位置付けられるのは、E01であろう。この瓦は弁数が16葉と倍になり、かなり文様の印象が異なるが、次の3点が共通点としてあげられる。

- ①丸瓦凸面の叩き目に格子・米字の2種類があること。
- ②蓮華文の周囲の圈線に壺錐状のもので珠文が彫られること。
- ③蓮弁・間弁の中央部を高く、基部と先端部とを低くして花弁の外反を表現していること。特に中房の周囲を彫り窪めている。

このため、両者に大きな時期差を認めるのは困難であり、その生産時期はかなり重なっていたと考えるのが自然である。ただし②の特徴については、C01が最初は圈線のみで珠文がなく（C01a）、途中で連珠文を彫り加え

ている（C01b）のに対して、E01にはわずか2ヶ所だけだが最初から珠文が彫られているという違いが認められる。これも、E01がやや後出すると考えられる証左となるであろう。

その次は③の特徴が共通するC02であろう。この瓦には、後続の範種と共通する次のような特徴がある。

- ④蓮子と蓮華文の周りの連珠文は竹管状のもので施文されること。

さらに次はC03とD01である。この両者では③の特徴がかなり弱くなり、文様面は一見平坦になる。ただし、中房の周囲を彫り窪める特徴はそのままである。蓮子は④の特徴を引き継ぐが、D01では連珠文は範に彫られており、その点で後出だと考えられる。なお、両者とも丸瓦凸面の格子叩きは、ローラー状のもので施文している点も共通している。

これら5範種の時期であるが、創建期が7世紀第4四半期に収まると考えられるので、それに後続するとすれば、一応8世紀前半に押さえることができる。そしてその上で、C02、D01といった、より新しく位置付けられる範種が上野国分寺から出土していることが注目される。別稿（高井 2003）で述べたように、上野国分寺創建の最も早い時期には、その当時生産が継続中の瓦窯の製品が搬入されたらしい（II-1期）。つまり、少なくともC02とD01とは740年代までは生産が継続していたと考えられる。C01の生産開始時期がどこまで遡るかは確証がないが、創建期の文様とはかなり隔たりがあるので、生産時期が直接つながるとは思えない。8世紀前半でも初頭までは遡らないのではなかろうか。現状では8世紀第1四半期の中頃かそれ以降と理解するのが妥当であろう。

4. 有絞り一本造りの導入と影響

それでは、この一本作り技法はどこから導入されたのだろうか。この技法が最も早く見られるのは榎本原遺跡・南滋賀廃寺など、南近江の地域であるとされる（林1975など）が、上野地域とはかなりの時期差が認められるし、しかも、その軒丸瓦は川原寺式を中心としており、上植木廃寺とは文様が全く異なる。直接の関係を指摘することは困難であろう。また、前述のようにC01の文様は上植木廃寺創建期の瓦の系譜を引いており、外からのものとは思えない。したがって上野の一本作り技法は、別の地域の工人がやって来て独自に作り始めたのではなく、上野国内の工人たちがどこかの工房へ出向いたか、或いはごく少数の指導者を招いたかして新技術を導入し、あくまでも在地の伝統の中で生産を開始したのだと考えられる。その技術の源流がどこにあるのかは今後の課題である。

8世紀第1四半期に上野国に導入された一本作り技法

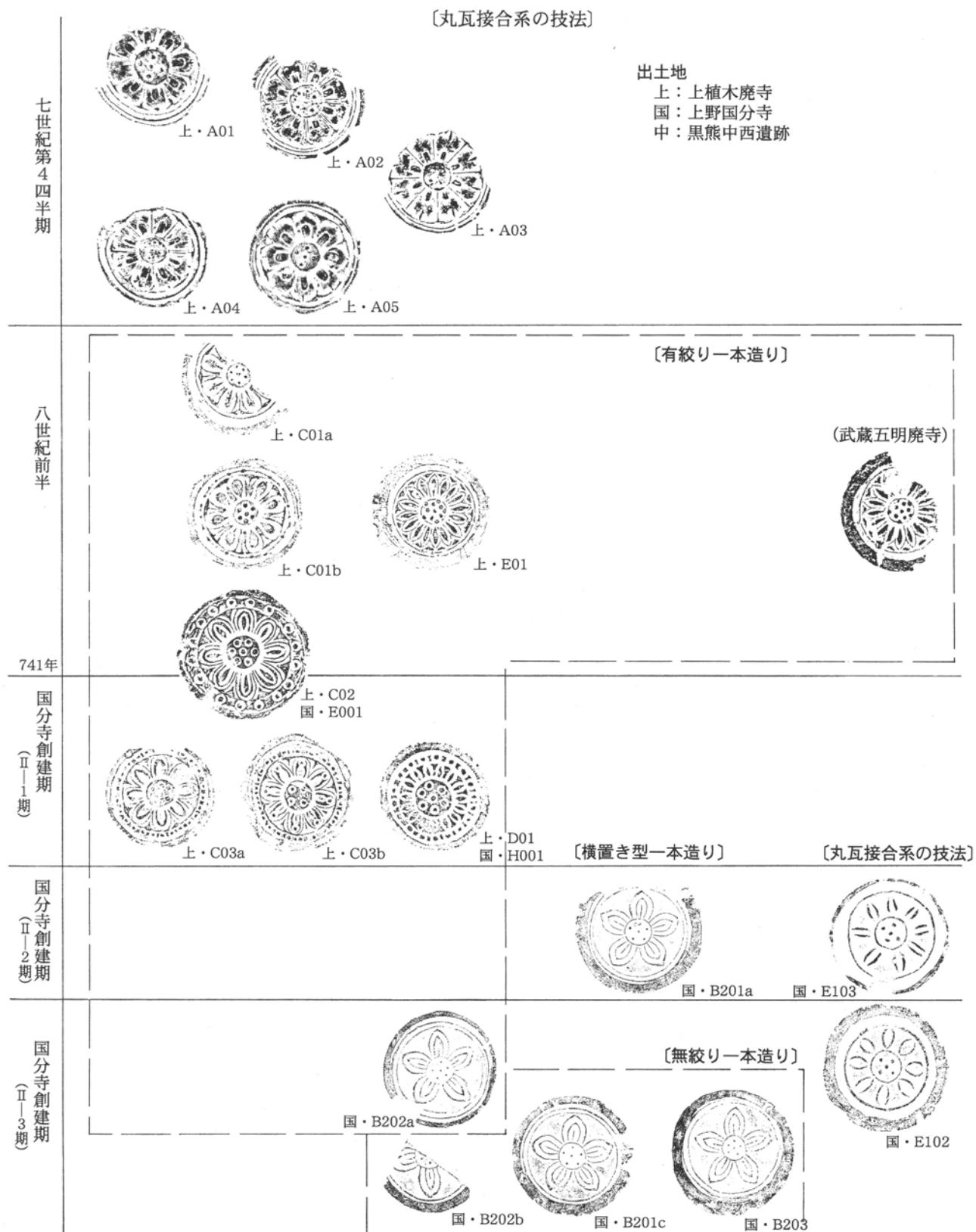


図7 上野国における主な一本造り軒丸瓦の変遷(1)

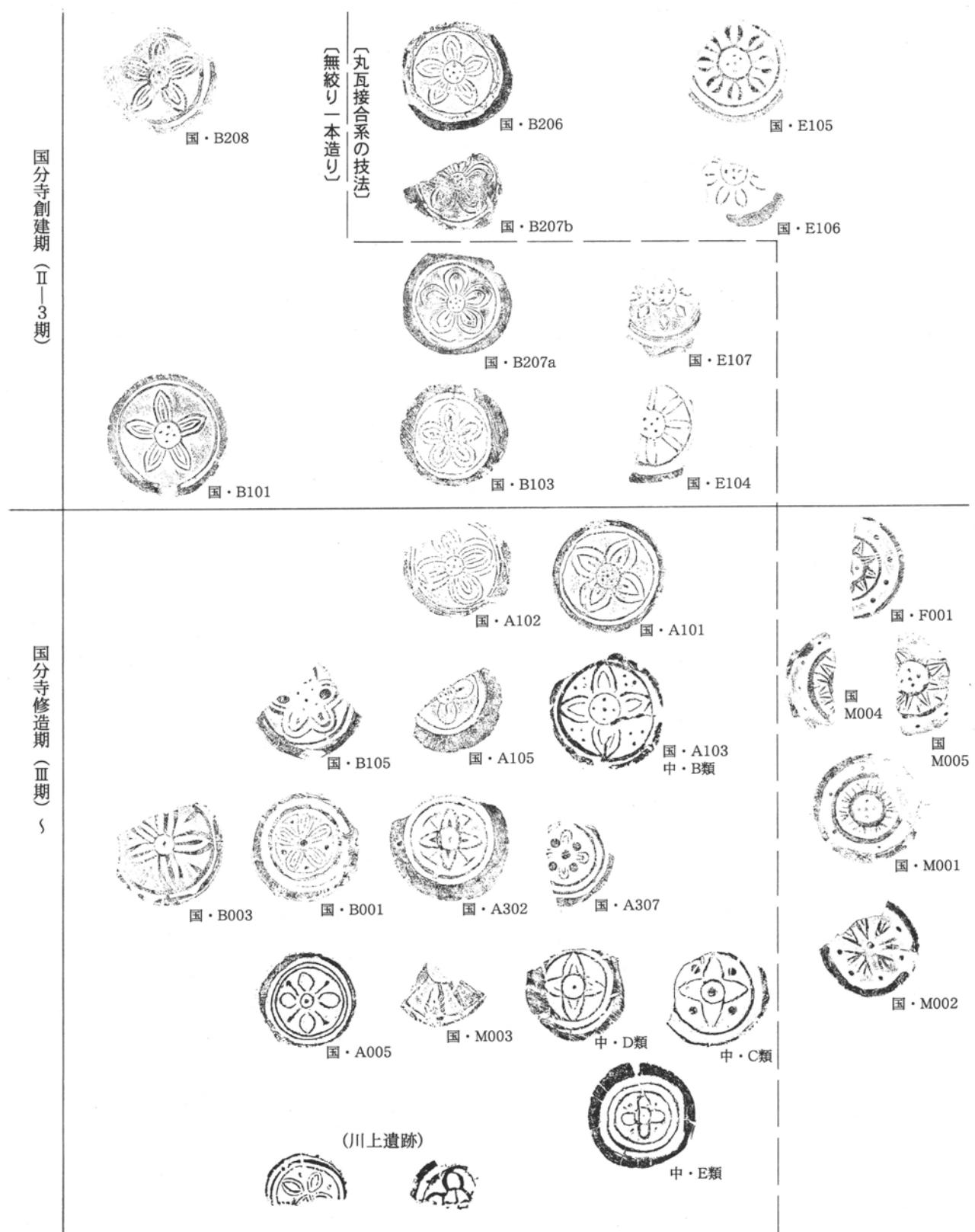


図8 上野国における主な一本造り軒丸瓦の変遷(2)

は、すぐに周辺地域に広がることになる。まずC01が上植木廃寺にしか見られない（例外的に金井廃寺に分布する）ことは前述した。この瓦は上植木廃寺に限定的に供給する瓦窯で作られていたのだろう。その後のE01は生産地が太田市萩原瓦窯に移り（ここだけに限定できるかどうかは不明）、上植木廃寺、寺井廃寺、そして国境を越えて武藏国五明廃寺に供給される。有絞り布目痕の一本作り軒丸瓦のうち、同範品が上野・武藏の両国に分布するのはこの一例だけであり、その後両国での同範例は見られないが、武藏国でもその後いくつかの範種が生産されて、武藏国北部の上野に近い地域の数遺跡に供給され、さらにそれが武藏国分寺創建期の瓦にまで続く。武藏国内の様相の詳細については酒井清治氏の研究（酒井1989）に詳しいのでここでは特に述べないが、蓮弁の周囲に蓮珠文が見られるなど、上野と同じ傾向の変遷を示すのは興味深い。酒井氏も述べられているように、武藏国一本作りの瓦の導入とその後の生産には、上野国東部の強い影響があったものと思われる。ただし、氏が、武藏国分寺造営の初期段階に「上野国、特に上植木廃寺を造営した首長層に協力を要請した」とされるのはいかがであろうか。武藏国分寺創建期の瓦の多くが上野系と呼ぶべき瓦であることは認められるが、明らかに上野国

内で生産されたと断言できるものや上野との同範品はまだ見つかっておらず⁸⁾、上野国が直接関わっている証拠は確認できない。これらの瓦の生産に直接関与したのはあくまでも武藏国最北部の地域であり、そこでの瓦生産が地域的に近い上野国の強い影響下にあったため、このような現象が生じたのだと考えるべきであろう。上野の影響は武藏国分寺にとってはあくまでも間接的であったといえ、直接の協力関係にあったと考えるのはやや過大評価であると思われる。

なお、上野国内には、このほかに中之条町平遺跡に有絞り一本造りの軒丸瓦がある（図9-1 中沢1982）。この瓦は単弁8葉ではあるが、中房には蓮子の代わりに十の文様がある。単弁8葉という文様と、有絞り一本造りという技法から考えれば、上植木廃寺のC01の影響で創り出された軒丸瓦である可能性がある。中之条町と同じ吾妻郡にある吾妻町金井廃寺では、上植木廃寺創建期の軒丸瓦A02と、さらにC01の同範品が表採されているといい（関東古瓦研究会1982）、吾妻郡と上植木廃寺とはかなり深い関係があると考えられるので、平遺跡の軒丸瓦が上植木廃寺の影響を受けて創出された可能性は高いといえよう。また、これによく似た瓦が利根郡月夜野町後田遺跡（図9-2・3）から出土している（麻生・大江1988）。ここでは単弁11葉となっている。この瓦には無絞り一本造りのものもみられるので、8世紀中頃まで下がるものであろう（無絞り一本造りの年代観は後述する）。このように国分寺創建期以前の有絞り一本造りは、上野国内では上植木廃寺と寺井廃寺を中心とした東部地域のほかは、吾妻郡・利根郡といった北部地域に限つて分布しているのである。

5. 横置き型一本造りの導入

741年に国分寺の創建が開始されると、地方の瓦生産は大きく変化していくことになる。上野国の場合、創建の最初期に国分寺に瓦を搬入したのは、その時点で生産を続けていた瓦窯であったと考えられ（II-1期。この間の事情について詳しくは高井2003参照のこと）、前章で紹介した瓦のうち、より新しい時期のもの、すなわちC02とD01とがそれに該当する。ただし、この時期の瓦の出土数はかなり少なく、国分寺向けに増産したということはないらしい。おそらくまだ体制が整わず、それまでの供給先に国分寺が新たに加わったというだけなのである。国分寺向けの大量生産が始まるのは次のII-2期になってからであり、本稿の関連からいえば、笠懸町鹿ノ川瓦窯でB201の生産が始まってからである。そして、そのB201の大部分が横置き型一本造りという新技法を採用しているのである⁹⁾。

B201a（図11-1）が横置き型一本造りで作られていることは、既に藪塚本町台ノ原廃寺の発掘調査報告書の

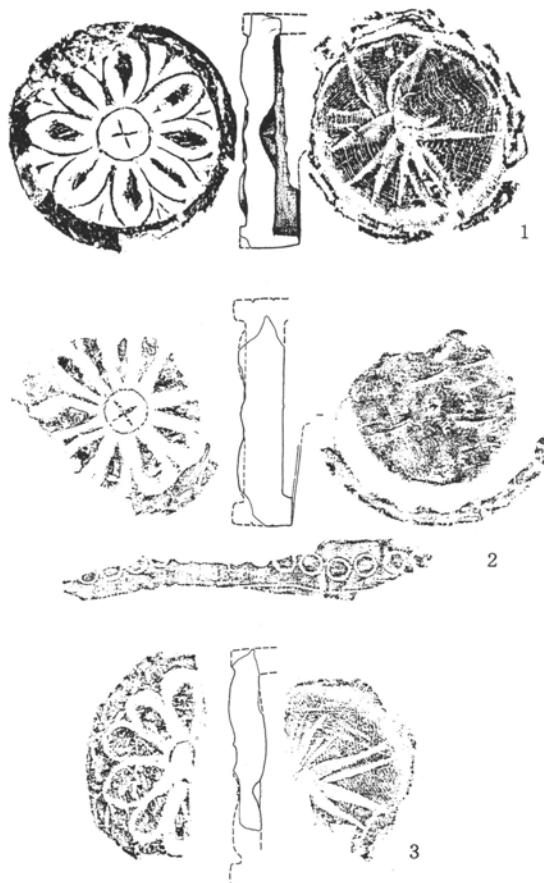


図9 平遺跡(1)・後田遺跡(2・3)出土瓦 (1/4)

付編（須田・高井 1986）で報告し、その後折に触れて紹介してきたとおりである。この瓦は技法の痕跡をかなりきれいに消し去っているため、ほとんどの個体では技法を考える根拠に乏しいが、台ノ原廃寺の出土品には国分寺では数少ない完形品やそれに近い破片が5点ある。そしてそのうち4点で、ごくわずかなものではあるが丸瓦側面にまで布目痕が残るものがあり、それによって横置き型一本造りであると推定できた。もちろん、丸瓦を接合したような痕跡が一切見られないことや、丸瓦部の横断面が半円形をなさない（図10）ことも横置き型を用いていると推定した有力な根拠である。丸瓦横断面は中央部が厚く、側端部が薄い、いうなれば三日月形に近い形状である。この断面形を見れば、丸瓦部がふつうの丸瓦を接合したものではないことは明らかであろう。

また、横置き型一本造りの場合、瓦当部の作り出し方には、折り曲げ式と積み上げ式があることが指摘されている（毛利光 1991）。筆者は前稿では瓦当部に横にヒビが入ることから、丸瓦部の粘土を上から折り曲げたと考えたが、現在では狭川正敏氏のご指摘も受け、積み上げ式の可能性が高く、ヒビは積み上げた粘土の接合部分だったのではないかと考えている。ただし、ちょうどヒビの部分で割れてしまった個体を観察しても、粘土を押さえた指の跡などはほとんど確認できず、どのようにして粘土を積み上げ、接合していったのかに疑問を残しており、筆者としては断定するまでには至っていない。

国分寺からはB201は合計333点出土しているが、分類が可能な破片は147点であり、そのうちaは103点を占める。後述するbが29点、cが15点なので、aが圧倒的多数を占めていることが分かる。おそらく分類不能とした小破片の大部分もaであると思われ、この瓦の大部分は横置き型一本造りで作られているものと思われる。

この瓦が生産されたのは笠懸町鹿ノ川瓦窯であることが判明しているが（須田 1986）、ここが属する中毛・東毛の地域は、前章で紹介した「有絞りの縦置き型一本造り」が行われていた地域である。そのような技術伝統があるところに、新しい製作技術が導入され国分寺向け

大量生産が行われたのである。この点は、その後の展開を考える上で重要なことである。

B201は新技法、大量生産ということ以外に、直前の瓦とはかなり異なる特徴があり、まさに画期的な瓦である。それは、

- ①文様が前代のどの瓦とも似ておらず、細い隆線のみで表す単弁5葉という特異なものであること。
- ②伴う軒平瓦も偏行唐草文という従来この地域に見られない文様をもち、その製作技法も一枚作りという新しいものであること。
- ③生産が笠懸瓦窯群という新しい場所で行われたこと。

つまり、この瓦はこれまでの文様、技術とは大きなギャップがある瓦なのである。古くはこの瓦があまりに稚拙な印象を与える文様をもっていたため、上野国内で創作された地方的な瓦と評価されていたように思う。しかし、これほどのギャップがあることを踏まえれば、ことはそれほど単純ではないことは明らかである。

この横置き型一本造りが8世紀中頃という限られた時期に、国分寺創建の瓦生産用に日本各地に伝播した技法であることはすでに広く知られていることである。そして多くの国で創建期の限られた時期にのみ採用され、その後廃れてしまう。上野国でもこの技法が見られるのはB201aのみであり、しかも後述のように、同じB201でも末期のb・cは違う技法になってしまう。B201の単弁5葉という文様はその後受け継がれ、長く上野独自のモチーフとして用いられるのに対し、技法は一過性だったのである。つまりこの技法は、新しく導入されたものの、地域に根付くことはなかったのである。

以上のことから考えると、この技法は国分寺創建期の大量生産にあたってどこからか導入されたことは確実だが、多人数の瓦工人が渡来・定着して製作にあたったということではないと考えられる。とすれば、先の有絞り一本造りの導入時と同様、少人数の瓦工人が指導者としてやってきたか、或いは在地の瓦工人がどこから学んできたか、いずれかの可能性が考えられよう。技術が一

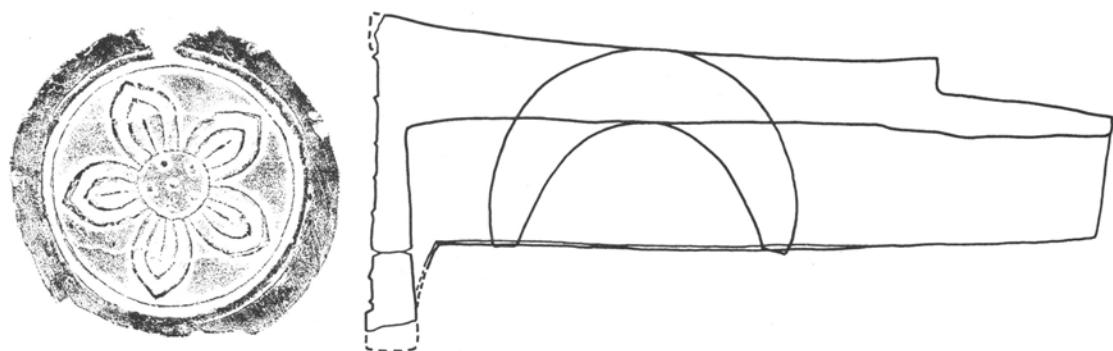


図10 台之原廃寺出土のB201a (1/4)

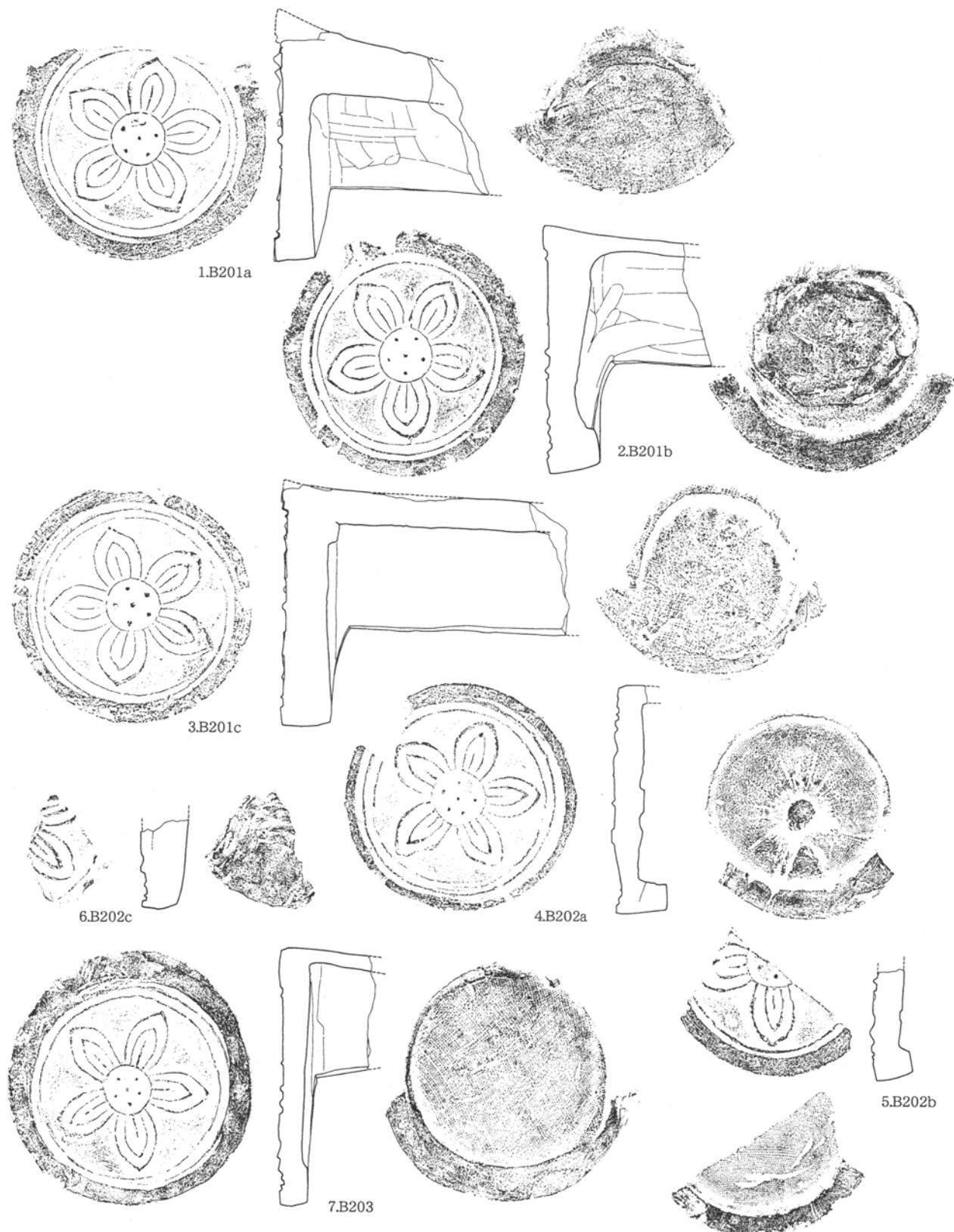


図11 上野国分寺の一本造り軒丸瓦 (1/4)

過性の割には瓦に新しい要素が多いことから考えれば、前者の可能性の方が強いのではないかと思えるが、断定する根拠はほとんどない。いずれにしろ、国分寺造営という難事業にあたって、国家的な技術援助があったことを示す好事例だと思われる。

6. 有絞りから無絞りへ

国分寺創建期に導入された横置き型一本造りが、上野国の瓦生産に大きな影響を与え、縦置き型一本造りにも無絞りから有絞りへの変化が起きたことも既に指摘したことがある。国分寺創建期以降の瓦にも多くの種類の瓦が縦置き型一本造りで作られるが、それはたった1範種を除いて瓦当裏面の布目痕が無絞りになっている。

その例外の1範種は、B202（図11-4～6）である。この瓦は前章のB201の直後に位置付けられる瓦で、瓦当裏の形態で3種類に分けることができる。aは有絞りの布目痕をもつもの、bは無絞りの布目痕をもつもの、cはケズリないしナデを加えて布目痕が見えないものである。このうちbには一部にケズリやナデを加えるものがあるので、cはその部分の小破片である可能性が高い。それが正しければbとcは同一の技法となるので、結局B202は有絞り・無絞りの一本造りで作られていることになる。その新旧関係は、範傷や彫り直しなどがないために瓦自体から判断することは困難であるが、その後の一本造り瓦がすべて無絞りの布目痕をもつことから考えて、a→b・cと考えるのが自然である。とすればこの瓦は、従来この地域にいた工人たち、すなわち前述したような有絞り一本造りを保持していた工人たちが、国分寺創建にあたってその国分寺用の瓦生産に動員されたことを示すものだと考えられる。当初文様は新來の国分寺用のものを採用したものの、技術は従来の有絞り一本造りを用いたのであろう。ところがその生産の最中に無絞り一本造りが考案され、そのため技術も変化したのではないかろうか。

この有絞りから無絞りへの変化はどのように考えたらいいのだろうか。実は8世紀中頃から後半の縦置き型一本造りで無絞りのものは全国的に見ても珍しい。後述のように関東地方にはこの時期以降のものが分布しているが、それはおそらく上野国から技術伝播したものであろう。今のところ、無絞りの布目痕をもつ縦置き型一本造りは上野国で工夫されたものだと思われる。

有絞りと無絞りとを比べてみると、結局瓦当裏面の布目痕が違うのと、丸瓦凸面の叩きの有無が違うだけである。有絞りのものには丸瓦凸面に密な叩き目、あるいはローラーによる叩き目が残るのがふつうだが、無絞りのものにはそれがなく、全面ナデられているのがふつうである。しかし叩き目の残りの有無は技法上の大きな違いにはならないと考えられるので、結局この両者の違いは

布の絞りの有無、つまり丸瓦製作用の模骨にどのように布を巻くのかという違いだけになる。製作工程も大枠は図3で示したとおりで、特に変更する点はない。有絞りから無絞りへの変化は、目で見てはっきり分かるほど明瞭なものではあるが、技術的にはさほど大きな変化ではなく、いわば一工夫を加えた程度のものであったと言うことができよう。ただし上野国内ではその変化ははっきりと確実に起きており、この変化する一時点を除いて両者が共存することはない。国分寺創建期を境に有絞りから無絞りの変化が起き、以後無絞りのものしか作られなくなるのである。その一時点とは、B201とB202の生産の途中である。

B201は先述のように大部分が横置き型一本造りで作られている（a）が、末期になると無絞りの縦置き型一本造り（b・c）が作られるようになる。B202の有絞りから無絞りへの変化も前述したとおりである。B202の文様はB201のものに比べればやや退化傾向にあるので、B201→B202の順に生産が開始されたものと思われるが、B201は生産量が桁違いに多いと考えられるので、生産時期はかなり長かったものと思われる。とすれば両者は、一時的には同時期に生産されていたこともあり得るので、両者の技法の変化もほとんど同時期であった可能性がある。またB202とほぼ同時期と考えられるB203（図11-7）は、すべて無絞りの縦置き型一本造りで作られている。つまりB201とB202の生産の途中で、なおかつB203の生産の直前にその変化が訪れているといえるのである。これら3範種が最古の無絞り一本造りの候補であるが、いったいどの範種で最初に用いられたのかは確定できない。これらの範種の瓦は、焼成・色調や細部の調整などの特徴がそれぞれ微妙に異なっており、同一の工人が同時期に作っていたとは思えないものである。したがってそれら3種の軒丸瓦を作っていた工人たちのいずれかが、無絞りにする工夫を考案したのだと思われる。これらの生産瓦窯はB201が笠懸瓦窯跡群の鹿ノ川瓦窯跡（一部山際瓦窯跡か）、B203は山際瓦窯跡である。B202は不明であるが、おそらくその両者のどちらかか、ごく近傍に所在する瓦窯であると思われる。とすればこの工夫は、笠懸瓦窯跡群の工人によって考案されたものであると考えられよう。その後のこの地域の瓦生産は、ほとんど山際瓦窯に集約されていくので、特にこの瓦窯が大きな役割を果たしたものと考えられ、そこからこの技法が広がっていったものと思われる。

7. 無絞り一本造りに関するいくつかの問題

有絞りを無絞りにするメリットが何なのかはこれもまたよく分からぬ。ただひとつ思いつくのは、有絞りの場合、瓦当裏面に大きな凹凸ができてしまい、ともすればそれがヒビ割れの原因になったりするのではないかと

いうことである。厚さを均一にするためには布の絞り目などない方がいいはずである。その際同じ一本造りである横置き型一本造りによる瓦が、瓦当裏面が平坦であることも影響したのではなかろうか。前章で述べたように、横置き型一本造りは有絞りから無絞りへと変化するちょうどその間に位置している。その変化に何らかの影響があったと考えるのが自然であろう（高井 2002）。

なおこの無絞りの縦置き型一本造りの軒丸瓦の一部については、かつてふたつの製作技術が推定されたことがある。それは大江正行氏の「布包み円筒状工具」（図12左、大江 1975・1986）の使用と、佐々木和博氏の「鍔状突起付丸瓦型木」（図12右、佐々木 1980）の使用である。このうち前者については、それが確実に用いられたものを見ることはできないことは既に述べたことがある（前沢・高井 1989）ので、ここでの再論は避ける。後者は以下に述べるように完全な事実誤認であり、そのような型木の存在を想定することはできない。

佐々木氏が特殊な型木を想定する根拠にされたのは、筆者が上野国分寺で「B203」に分類した軒丸瓦のある1個体である。佐々木氏はその瓦を観察された結果、瓦当裏面に丸瓦部のはがれたような跡があつてそこに布目痕が残り、しかもそれが瓦当裏面に広く見られるネガの布目痕ではなくポジの布目痕であることを根拠に、「瓦当背面と接合面との布は同一時に使用されたものではないことが分かる。瓦当部の接合面でのポジ布目痕は丸瓦部の凹面のネガ布目痕によるものとすることができよう（74ページ）」とされ、「すなわち瓦当と丸瓦は別々に成形し、丸瓦は型木から取り外して瓦当と接合した（75ページ）」とされたのである。つまり、この瓦は一本造りではないと評価されたのである。そしてさらに、その丸瓦と瓦当との接合面の形態が、「瓦当背面から表面端部に向かって薄くなっている。つまり瓦当接合面は丸瓦に対して斜めになっている」ので、「丸瓦も瓦当の傾斜に対応する形状一すなわち丸瓦端部の凹面が斜めになる楔状を呈していた（75ページ）」とされて、図12右のような特殊な型木を想定されたのである。

氏の観察された個体は、現在群馬県立歴史博物館に所蔵されているものである。筆者もこの個体を観察したことがあるが、諸特徴は県教育委員会の発掘調査によって上野国分寺から出土したB203と変わることなく、この個体も上野に一般的な無絞り布目痕をもつ縦置き型一本造りによるものと判断できる。そもそも氏の想定にはいくつかの疑問がある。最も大きいのは、丸瓦接合系の技法であるならば、瓦当裏面の布目

痕はどのように付いたのかということである。さらにこの瓦の瓦当裏面の下半部には、「氏も「周縁背面が高く造ってある」と述べられているように、不要な丸瓦部を切り取った名残と考えられる凸帯が残っており、これもどのようにできたのかということである。しかもその凸帯の凹面側を観察すると、瓦当裏面から続く布目痕が残っていて、この部分が瓦当部と同時に造られていることは確実なのである。加えて丸瓦部の凸面にも凹面にも接合用の補足粘土は全く貼付されておらず、これでは丸瓦部の接合は不可能である。以上の疑問について氏は全く触れておられないが、これらが縦置き型一本造りを想定すればすべて解けることはいうまでもない。ただひとつ、丸瓦が剝離した跡に残る布目痕の存在は問題である。たしかにこの個体を観察すると、ポジかネガかはあまり明瞭ではない（筆者にはネガであると思われる部分も多い）ものの、丸瓦部が剝離した跡にわずかな布目痕が残っている。残念ながらその布目痕と瓦当裏面の布目痕とはごく幅の狭いナデで分断されているため、両者が本来続いているものかどうかはわからない。しかし、両者は布目の細かさや方向などがほとんど同じであり、同時に同一の布から付いた可能性が高いものと思われる。おそらく、図3で示したような工程のうち、②の時、すなわち丸瓦部となる粘土と瓦当部となる粘土とを接合する時に、型木に巻いていた布が少しだぶついていて、両者の接合面に布が入り込んでしまったために、丸瓦が剝がれた部分に布目痕が残っているのではないかと思われる。このように布が食い込んでしまう現象が起こる可能性は、既に林博通氏によって指摘されていることである（林 1975）。

以上、「布包み円筒状工具」や「鍔状突起付丸瓦型木」は、今までに知られている資料を見る限り、存在しないものと思われる。それらはみな縦置き型一本造りで造られている。ただし、誤解のないように付け加えておくと、瓦当裏面に布目痕があるからといって、単純にすべて一本造りだと断言するつもりはない。布押圧技法など、丸瓦接合系の技法でも瓦当裏面に布目痕を残す技法は存在する。今後もひとつひとつ現品にそって、詳細な観察

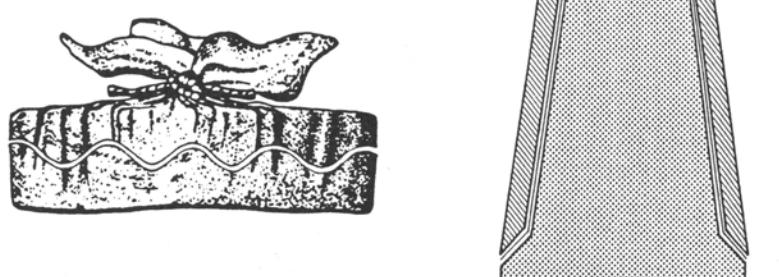


図12 布包み円筒状工具（左・大江 1975）と鍔状突起付丸瓦型木（右・佐々木 1980）

に基づいて結論を出していかなければならないことは言うまでもないことである。

前述したようにこの無絞り一本造りは、山際瓦窯を中心とした笠懸瓦窯跡群で考案され、その後多くの瓦が生産されることになったが、ここではその中心となった瓦窯らしく、いくつかの試行錯誤の跡が見られる。特に注目されるのは、特殊な布の使用と、布と模骨の接着である。これについて詳細は拙稿(高井 2002)を参照していただきたいが、模骨に布を、シワが寄らないようにしてかぶせるために、特殊な布を用いたり、布を模骨に接着したりしている。そこには、無絞り一本造りの欠点を克服しようという工人たちの努力が見て取れる。

また周知のように、上野国分寺の創建期には、この技法を用いて、単弁五葉という一見よく似た文様の瓦が何種類も作られている。このように短期間に多くの種類の範が用いられることについては、鈴木久男氏の意見がある。氏は上野国分寺やその他の遺跡で同型式(同文様)のものが多く出土する理由として、「第1次成形から仕上がりまで瓦当範が瓦当面に付いたままになっていることと、通常の軒丸瓦を完成させるよりも、時間がかかったものと思われる。特に、丸瓦部の不必要な各所を切り取るまでに、ある程度丸瓦を乾燥させていたのではないだろうか。このため、複数の瓦当範が必要になったのである¹⁰⁾。」と述べられている(鈴木 1990 191ページ)。つまり、氏によると、範を付けたまま乾燥するという工程が想定され、そのため一つだけの範では作業効率が悪く、複数の範が必要になるということである。すると同時に複数の範の製品が作られるのであるから、当然瓦当文が違うだけで、その他の特徴はみな同一の瓦が数多く作られるはずである。ところが上野国分寺出土の瓦を観察すると、範が違う瓦は、各部の大きさや調整方法、胎土・焼成・色調の特徴などが微妙に違い、とても同時に作られたものとは思えない。もちろん山際瓦窯の長い操業期間の中では複数の範が用いられていたのであるから、そのうちのいくつかが一時重複して用いられていた可能性は否定できない。しかしそのような場合はかなり少なかったようであり、同時に作られていた瓦を抽出することはまだできていない。蛇足ながら付け加えると、現在では図3の③のように、範は上から打ち込んだと考える説が有力であり、範を付けたまま乾燥させる工程の必然性はないことになる。

8. 無絞り一本造りの展開

このように笠懸瓦窯跡群付近で作られ始めた無絞り一本造りは、その後の上野の瓦生産に大きな影響を与えた。山際瓦窯ではその後作られるすべての軒丸瓦がこの技法によって作られようになる。有絞りの一本造りは上野国内ではあまり広がりを見せなかつたが、この技法は上野

国内の生産地でもかなり広く受け入れられるようになり、利根川の西側、西毛地域でも生産が開始される。それらのうち、主な瓦の変遷案は図7・8の通りである。

その受け入れの状況をよく示しているのは、藤岡市の金山瓦窯付近の瓦生産である。この付近ではB207とB103が出土・表採されている。これらはB207→B103の順であると考えられるが、このうち、B207は無絞り一本造り(a)と印籠付け(b)、B103は無絞り一本造りで作られている。残念ながらB207自体の検討からは、印籠付け、無絞り一本造りのいずれが古いのかは分らないが、その後のB103が無絞り一本造りであるので、印籠付けから無絞り一本造りへ変化したと考えるのが自然であろう。つまり、この地域では、当初從来この地域に技術伝統があった印籠付けによって国分寺向けの瓦生産が開始されたが、途中で無絞り一本造りに変化したことになる。筆者はB206もこの付近で生産されていたと考えているが、それが正しければB206は印籠付けによって作られているものしかないので、印籠付けから一本造りへの変化が一層明瞭になる。この瓦窯を含む吉井・藤岡瓦窯跡群では、以後生産される瓦はみな無絞り一本造りになる。

また、E103を初めとした単弁8葉で、()形の蓮弁をもつ一群も興味深い変遷を示している。このE103は国分寺創建期のII—2期に属するもので、上野国分寺ではB201について出土数が多い。特に創建期の塔はこの2種類の瓦で葺かれていたと推定できるほどである。その生産地は吉井・藤岡瓦窯群の吉井町側だと思われるが、以後同系の瓦は高崎市乗附窯跡群など、西毛の地域のいくつかの瓦窯で作られていたらしい。ただ、B201の系譜を引く瓦が長く作られ続けるのに対して、E103の同系瓦は9範種ほどしか知られておらず、上野国内では主流になり得なかった瓦文様である。その技法を見るとE103を初め、それと近い時期の生産品と考えられるE102などはみな印籠付けで作られている。特にE103は、それと組み合うと考えられる軒平瓦NH301が桶巻き造りで作られており、軒丸・軒平ともに製作技術は從来から在地にあった技法で作られている。桶巻き造りは国分寺創建期に一枚造りに取って代わられ、国分寺向けの本格的な瓦生産が開始されるII—2期以降、桶巻き造りで作られるのはこのNH301のみである。同系の軒丸瓦はその後も印籠付けを保持するが、文様の退化傾向がかなり強く、ほとんど最末期に位置付けられると思われるE107、E104では無絞り一本造りに変化する。この系統は文様の上でも技法の上でも東毛系のものに凌駕されていくのである。

以上のように上野国内では無絞り一本造りが主流の技法となっていくが、それでも旧来の印籠付けなど、丸瓦接合系の技法も残っていく。上野国分寺の報告書ではIII期(修造期)の軒丸瓦として48範種を報告したが、そのうち明らかに丸瓦接合系の技法であるものは14範種であ

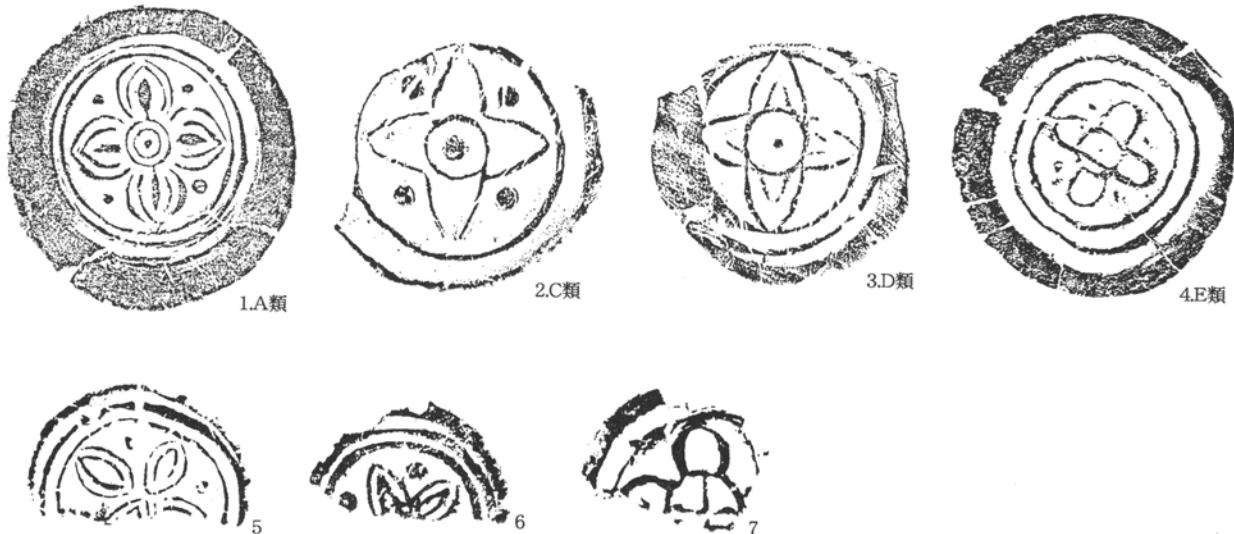


図13 黒熊中西遺跡（1～4）、川上遺跡（5～7）出土瓦（1/4）

る。そのなかで2範種は下野国分寺と同範であり、下野国からの搬入品であると思われるが、上野国内産は12範種となる。ちょうど4分の1の数である。この12範種のすべての生産地を明らかにするのは困難だが、図8右端に示した一群の瓦は興味深い。これら5範種の瓦は文様の上からも一つの系譜にあるものと思われるが、これらはすべて丸瓦接合系の技法によって作られている。しかもこれらのうち、F001、M001、M002の3つまでが前橋市山王廃寺から表採、ないし出土しているのである。残念ながら5範種とも生産地が判明しないが、いずれも山王廃寺と関連が深いものと考えられ、とすれば、山王廃寺に関係する工人集団の間には、独自の製作技術を保持し続けたものがいたことになる。

上野国内における一本造りがいつまで続いたかはよく分からぬ。国分寺出土瓦の中で最も新しいと考えられる一群の瓦にも一本造りのものが見られるが、国分寺存続期間中は生産されていたものと考えられる。また吉井町黒熊中西遺跡には、C類、D類、F類のような、国分寺に存在が知られていない、退化傾向の著しい瓦があり（図13-2～4）、それらはみな無絞り一本造りで作られている。ここではこれらの瓦が使用されていた基壇建物の存続年代が、「10世紀前半頃に造営され、11世紀（前半）頃に廃絶した」と考えられている（須田 1992 183ページ）ので、これらの瓦はその期間の後半に考えられるであろう。さらに赤堀町川上遺跡から出土する軒丸瓦（図13-5～7）は、国分寺系の瓦でも最も退化傾向の著しいものと考えられるが、これらも瓦当裏面に無絞りの布目痕を残し、一本造りである。これらの瓦は黒熊中西のものよりも後出すると考えられるが、川上遺跡の概報（松村1970）によれば、瓦が出土する遺構の上には天仁元年（1108）に降下した浅間B軽石が堆積していたと

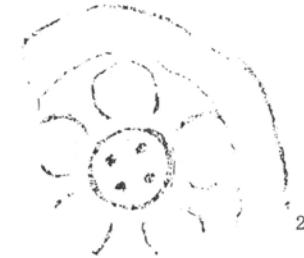
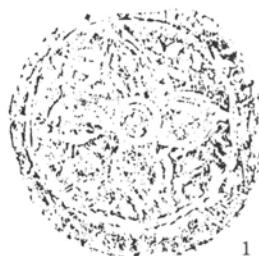
いうので、12世紀まで下ることはない。とすれば現状では、少なくとも11世紀のどこかまでは、一本造りが続いていたということになる。

9. 無絞り一本造りの国外への伝播

無絞りの一本造りも上野国から周辺に伝播していく。上野国外で無絞り一本造りが見られる古い例は、武藏国分寺の創建期の瓦であり、酒井氏が3期、あるいは4期のうちでも3期にきわめて近いか重複する時期とされた時期の瓦であり、みな単弁8葉の文様をもっている（酒井 1989）。酒井氏はこれらの瓦も上野系と呼ばれている。確かにこれらの瓦の文様の源流は上野に求めることが可能であろう。おそらく、それは氏も指摘されるとおり、上植木廃寺のC01である。しかしC01のような単弁8葉は上野国では既に過去の瓦文様であり、無絞りに変わる頃、つまり国分寺創建期の頃にはそのような瓦は作られていない。武藏国分寺の無絞り一本造りの瓦の文様は、この時点では上野の影響というよりは、武藏国内で受け継がれてきた文様であるといえる。つまりこの時期には、技法だけが上野国の影響を受けて変わっているものの、文様は従来の系譜を受け継いだものが使われていたことになる。この点で有絞り布目の導入の時とは全く異なるといえる。しかも武藏国分寺では無絞り一本造りによる瓦はこの時期に限られ、氏の言葉を借りれば、「無絞りの一本造りを僅かに採用するものの、すぐに印籠付けに変え、文様は上野系ではあるものの上野の技術を排除し、非上野系の方向を取るようになる。」ということになる。

その後平安時代には、武藏国北部で無絞り一本造りが僅かに見られる。児玉郡美里町宮ヶ谷戸遺跡、大里郡岡部町石原山窯跡、行田市旧盛徳寺（星間他 1986・1988）、上里町中堀遺跡（田中・末木 1997）などである（図14）。

宮ヶ谷戸遺跡



(黒熊中西遺跡A類)

石原山窯跡



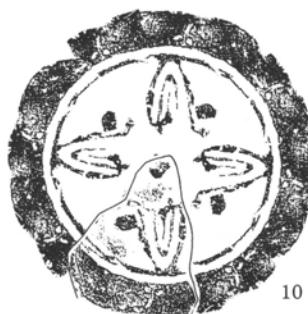
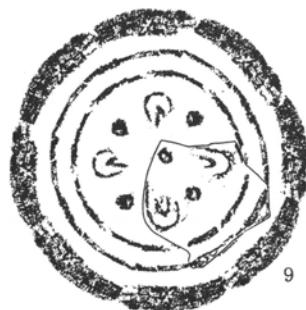
旧盛徳寺



(黒熊中西遺跡C類)

(上植木廃寺G02)

中堀遺跡



(上野国分寺A307)

図14 北武藏の無絞り一本造り軒丸瓦 (1/4) (上野のものは1/6)

これらの遺跡の瓦には、明らかに上野国の影響が見て取れる。宮ヶ谷戸遺跡の5は黒熊中西遺跡のA類に酷似し、同範の可能性がある。この瓦は上野国分寺からも表採されているという。石原山窯跡の7も黒熊中西遺跡のC類などに印象が似ている。さらに、旧盛徳寺の8は坂野氏が指摘されるとおり(坂野 1982)、上植木廃寺のG02¹¹⁾の系譜を引く文様であろう。中堀遺跡の9は上野出土例に似ており、上野国分寺A307とほぼ同じ文様構成をもつ。実物照合をしていないので断言はできないが、同範の可能性は高い。A307は上野国内では上野国分寺でしか出土しておらず、しかも国分寺でも1点のみの出土である。

同遺跡の10は9からの型式変化であろう。また、各遺跡から出土した軒平瓦を見ると、まるで平瓦の叩き目のような格子文様を瓦当文とするものがある。同様なものは上野国分寺や川上遺跡などでも見ることができるので、これらも上野の影響を強く受けたものだと言えよう。この時期の瓦はいずれの遺跡でも出土数が多くないので、詳細は不明な部分が多いが、国境を越えての技術的な交流は前代に続いて行われていたことがわかる。そのような上野と武藏北部との密接な関係は、古代を通じて維持され続けたのである。

10. おわりに

以上、上野国における一本造り技法の動向をまとめました。8世紀前半から11世紀にいたるまで、上野国では一本造り技法が用いられ、多くの範種の瓦が生産された。特に9世紀以降の国分寺修造期には、上野国における瓦製作技法の主流となり、数多くの瓦がそれによって作られた。

この一本造りの動向を整理してみると、画期は3回あったことに気づく。1回目は、もちろん最初の導入の時である。2回目は横置き型一本造りが導入された時、3回目は有絞りが無絞りに変わった時である。地方の国の場合、ある画期を境にして瓦の様相が一変してしまうようなことがよくある。まるで工人が全て入れ替わってしまったかのように、文様・技法の違う瓦が作られるようになるのである。しかし、上野国はそれとは異なるようである。これらの画期の時を見てみると、いずれも在地の工人たちがその伝統を残しながら新しい技術を取り入れていることがよく分かる。1回目は、文様が従来の系譜から理解できるものであり、その中に縦置き型一本造りという新技術を取り入れている。2回目は大きな画期で、技法的にも文様的にも、そして生産量などの点でも異なる瓦が作られるが、それはすぐに消化され、従来の技法の延長線上に戻ってしまう。そして3回目の画期を迎えることになる。この3回目の画期では、特に山際瓦窯で、特殊な布を用いたり、模骨に布を接着したりという試行錯誤が見られることが興味深い。またそれ以上に、「無絞り」という工夫を考案したことも、興味深い事実である。そこには工人たちの創意工夫が見て取れるからである。このように上野国では、在地の工人たちが新技術を主体的に受け入れ、それを自分たちの技術体系の中に消化していったのである。

古代の製作技術、特に地方における製作技術の研究においては、そのような工人たちの創意工夫、主体性をもった試みはあまり問題にされず、全体の中に埋没させられてしまっていると思う。しかしそりよいものを作ろうという工人たちの思いこそ、技術を進歩させる原動力であったはずであり、そのようなことを明らかにしていくことも、考古学の役割であると考える。律令国家=中央集権という固定的な見方のみに拘泥した、中央からの文様・技術の伝播と、地方における受容という視点だけでは、地方の歴史は無味乾燥のものとなってしまうであろうからである。

本稿を作成するにあたっては下記の方々・機関にお世話をになりました。文末ながら記して、感謝の意を表したいと思います。

伊勢崎市教育委員会、出浦 崇、須田 茂、栗原和彦、群馬県教育委員会、前沢和之（敬称は略させていただき

ました）

註

- 1) 一本造り技法を初めて報告されたのは木村捷三郎氏（木村 1969）である。氏によれば一本造りとは、「瓦当部と筒部を同時に共土で作り上げる方法」であり、「生瓦をつくる粘土板は（瓦当部と共作りであるため）上下に普通のより広く、「型木に粘土板を巻きつけ、上部を折りまげて型木の上端を掩い、瓦当部をつくる」とされている。この定義からすれば、瓦当部の粘土をあとから加えたり、あるいは複数回に分けて粘土を足すような技法は、厳密には「一本造り」とは呼べないことになる。林博通氏が南滋賀廃寺の軒丸瓦の技法について、「いわゆる一本造り」と、「いわゆる」を付して呼称されたのはそのためだという（林 1999）。しかし、その後の研究では、このようにあとから粘土を足すような技法も一本造りとして扱うのが一般的であり、筆者も本文に述べたような考え方からこれらのもも含めて「一本造り」と呼ぶことにしている。なお、この問題については坪井清足氏の論考（坪井 1988）も参照のこと。
- 2) 上植木廃寺創建の年代観については古代瓦研究会第5回シンポジウムで発言した通りである（このシンポジウムの内容は、『古代瓦研究II』として近刊の予定である）。この年代はこれまで発表されたどの研究よりも新しくなってしまうが、尾張地域の影響によって上植木廃寺創建瓦が作られたという前提に立てば、この年代にならざるを得ないと考えている。
- 3) これは筆者らが独自に付けた上植木廃寺出土瓦の分類番号である。上植木廃寺出土瓦の分類番号にはすでに須田茂氏のものがある（須田 1985）が、須田氏は当時知られていた出土瓦（発掘調査が始まったばかりの時期であったので、その大部分は表採資料であった）を検討され、概ね古く編年できるものから順に、軒丸瓦は001から、軒平瓦は501から番号を付けられた。しかしこの方法では、新範種が出現した時に一番若い番号になってしまうという欠点がある。実際、発掘調査の進展の結果いくつかの新範種が出土していて、番号の付与に困難を感じている。そのため、上植木廃寺出土瓦の再整理に着手した際、伊勢崎市教育委員会の出浦崇氏と協議の上、アルファベット1桁、数字2桁からなる新分類番号を付けることとしたものである。ただし、本稿では対照のため、須田氏の分類番号も併記することにした。
- 4) 同範品の分布については、各遺跡の報告書などのほか、関東古瓦研究会『第3回関東古瓦研究会研究資料No.3』（1982）を参考にした。
- 5) 塔と西回廊との間はわずかしか離れていないので、昭和60年に調査が行われたS003-W038トレンチでは、両方の基壇が掛かってしまっている。そのため、ここからの出土品はどちらの建物のものとも断定できないので、「塔・西回廊」と表記することにした。
- 6) E01が上野国分寺から出土したとの情報もある（前沢・高井 1989 311ページ註13）が、報告書作成の際の整理作業時には確認できなかつたし、表採品にも知られていない。ただし、筆者自身国分寺で米字叩きの平瓦を表採したがあるので、E01が少数搬入されていた可能性は否定できない。国分寺では長期にわたった調査の間、出土品の保管に少からぬ混乱があったようであり、そのため行方不明になっている可能性もある。
- 7) C01が一本造りの最初のものであるという年代観は、シンポジウム『北武藏の古代寺院と瓦』で坂野和信氏が明確に述べられている（高橋ほか 1983 58ページ）ほか、研究者間で特に異論はないものと思われる。
- 8) 上野国分寺B206が武藏国分寺関連遺跡から出土しているが、これは単弁5葉で製作技法が印籠付けによるものであり、創建期でもやや時期が新しいものである。したがってここでの議論からは除かれる。また、このような同範品が出土するとはいっても、その数はごくわずかであり、これだけで上野国が造営に直接係わったということはできない。
- 9) B201には瓦当裏面の形態に3種類があり、a・b・cと呼び分けている。範の摩耗状態から、a→b→cと変化していることが分かっている。横置き型一本造りを採用しているのはaであり、これが最も数が多い。b・cは生産の末期のもので、後述するように無絞りの縦置き型一本造りで製作されている。

- 10) 文章のつながりにやや疑問があるが、そのまま引用させていただいた。
- 11) この「G02」も、筆者が付けた上植木廃寺における分類番号である。上植木廃寺出土の軒先瓦については既にすべての範囲に分類番号を付けていたが、創建期（高井・出浦 2001）とその後の有絞り一本造りのもの（本稿）以外はまだ未発表である。近いうちにその全容を発表する予定である。なお、同範囲が上野国分寺から表採されている（関東古瓦研 1982）が、県教育委員会の発掘調査では出土しておらず、国分寺における分類番号は決まっていない。

参考文献

- 麻生敏隆・大江正行 1988 「後田遺跡II」群馬県埋蔵文化財調査事業団
伊勢崎市 1984 『上植木廃寺発掘調査概報』I
伊勢崎市 1985 『上植木廃寺発掘調査概報』II
伊勢崎市教育委員会 1985 『上植木廃寺昭和59年度発掘調査概報』
伊勢崎市教育委員会 1986 『上植木廃寺昭和60年度発掘調査概報』
伊勢崎市教育委員会 1987 『上植木廃寺昭和61年度発掘調査概報』
伊勢崎市教育委員会 1988 『上植木廃寺昭和62年度発掘調査概報』
伊勢崎市教育委員会 1992 『上植木廃寺平成2・3年度発掘調査概報』
伊勢崎市教育委員会 1994 『上植木廃寺平成4・5年度発掘調査概報』
上原真人 1997 『歴史発掘11 瓦を読む』講談社
大江正行 1975 「瓦当部背面の製作技術について」『上野国分寺寺域縁辺部の調査』群馬県教育委員会
大江正行・川原嘉久治 1982 「天代瓦窯跡存在の意義をめぐって」『天代瓦窯遺跡』中之条町教育委員会
大江正行 1986 『第11回関東古瓦研究会研究資料』
関東古瓦研究会 1982 『第3回関東古瓦研究会研究資料 No. 3』
木村捷三郎 1969 「平安中期の瓦についての私見」古代学協会編『延喜天暦時代の研究』吉川弘文館
酒井清治 1982 「瓦の製作技法について」『埼玉県古代寺院跡調査報告書』埼玉県史編さん室
酒井清治 1989 「武藏国分寺創建期の瓦と須恵器」『埼玉考古』26 (のち、同氏『古代関東の須恵器と瓦』同成社 2002所収)
酒井清治 1995 「熊谷市西別府廃寺出土の瓦について」『王朝の考古学』雄山閣 (のち「幡羅郡の寺院跡」と改題して前掲書所収)
坂詰秀一 1966 『上野・金山瓦窯跡』藤岡市教育委員会
佐々木和博 1980 「瓦当背面に布目痕を有する軒丸瓦」『史館』12
鈴木久男 1990 「一本造り軒丸瓦の再検討」『畿内と東国の瓦』京都国立博物館
須田 茂 1985 「上植木寺院跡の軒瓦の型式分類」『伊勢崎市史研究』3
須田 茂 1986 「鹿ノ川窯跡」『群馬県史・資料編2』群馬県
須田 茂・高井佳弘 1986 「台ノ原廃寺の瓦について」『台ノ原廃寺発掘調査報告書』II 蔽塚本町教育委員会
須田 茂 1992 『黒熊中西遺跡(1)』群馬県埋蔵文化財調査事業団
外尾常人 1987 『五明廃寺発掘調査報告書』上里町教育委員会
高井佳弘・出浦 崇 2001 「上野の『山田寺式』軒瓦」『古代瓦研究会 第5回シンポジウム発表要旨 飛鳥白鳳の瓦づくりV』奈良文化財研究所
高井佳弘 1992 「国分寺創建期の軒丸瓦製作技法」『新版古代の日本8 関東』角川書店
高井佳弘 2002 「一本造り軒丸瓦における布と模骨」『研究紀要』20 群馬県埋蔵文化財調査事業団
高井佳弘 2003 「上野国分寺の創建」『日本律令制の展開』吉川弘文館
高橋一夫・大江正行・有吉重蔵・坂野和信・酒井清治 1984 「シンポジウム『北武藏の古代寺院と瓦』」『埼玉考古』22
田中広明・末木啓介 1997 『中堀遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団(このうち、「V結語1 中堀遺跡出土の遺物について(10瓦)」は木戸春夫氏執筆)
坪井清足 1988 「一本造り軒丸瓦について」『歴史学と考古学 高井悌三郎先生喜寿記念論集』
中沢 悟 1982 「天代瓦窯跡周辺の考古学的環境」『天代瓦窯遺跡』中之条町教育委員会